

---

# カズンズ

腹減りました

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】  
カズンズ

【Nコード】  
N2201X

【作者名】  
腹減りました

【あらすじ】  
特にありませんあまり考えてません。

## ベイビー

僕のアパートに赤ちゃんの死体が届いた。

段ボールに梱包され差し出し人の名前が無かった。

荷物を開けていないうちは随分古臭い手口の詐欺だなと思いつつ僕は段ボールを開けるのも面倒でしばらくしたら段ボールを捨てようと考えていた。

普段の僕なら間違いなくこういった怪しい荷物は受け取らないのだがこの時の僕はとても疲れていたしなにより人と会話するのが嫌だった。

僕が荷物を持った宅急便の配達者に荷物を受け取りたくないが受け取らないという気持ちを伝えるとなると荷物を持った配達人と会話をしなければならぬ。

僕は会話をするくらいなら荷物を受け取ろうと思ひ荷物を受け取った。

荷物を受け取った日、僕は荷物の中身を見なかった。

ドイツビールを飲みながら輸入代理店で買った少々高いナッツをつまみ、ヴァンパイアウィークエンドというニューヨーク出身のロックバンドのCDを流して今日の疲れを消化していった。

僕はよく疲れる種類の人間だ。

幼い頃から常に疲れと闘いながら人生を過ごしてきたように思える。疲れについてはどこかで対処しなければいけない。

対処方法は人生を進めていくうちに少しずつ変容していったが変わらず残っている考え方は1人になることである。

僕の存在する空間に他者を入れないことが僕が考える疲れへの対処の基本原理であった。

最近酒をよく好んで飲む。

酒の種類は問わない。好みはあまりないが、ベストを決めるとするならばドイツビールがベストである。一定の量を長い時間をかけて

飲む。

僕は大学のころドイツビールをよく好んで飲んでた。

同じクラスの友人がドイツと日本人のハーフで僕はハーフの友人とよく冷えたグラスに常温のドイツビールを注ぎ古いアパートの小さなハーフの友人の部屋でオセロをした。

僕のドイツビールの最初のイメージとしては温いビールをそのまま飲むと思っていたので冷えたグラスに注いだときは驚きを覚えた。

オセロをしながらよくハーフの友人はドイツのオクトーバーフェストについて話をしてくれた。

「オクトーバーフェストでは祭りが終わる最後まで1リットルのジョッキにビールを注ぎ続けるんだ。ミュンヘンの修道女もその日はかりはつまみも食べずビールテントの中や路上で1リットルのジョッキを片手にビールだけを一心不乱に飲み続ける。僕も父と一緒に参加した時は口の中が口内炎だったけどビールでのどを鳴らし続けたよオクトーバーフェストはミュンヘンの町が小麦色に染まる夢のような祭りなんだ」

僕は毎晩のようにこの話を聞いていたが話を聞くたびにドイツに行きたくなる。

友人の小さな部屋でドイツビールを飲んでいただけで気分が高まるのにドイツの小麦色の町で飲んだら自分の気持ちごとくまで高まるのか知りたかった。

ハーフの友人はオセロが1ゲーム終わるたびにドイツの様々な話をしてくれたがオクトーバーフェストの話は今でも思い出せる話の一つだ。

大学時代のハーフの友人は今でも面識がある。

2年に1度ぐらいのペースでお互いの近況を報告し合い、やはりあの頃のようによく冷えたグラスにドイツビールを注いで飲んでいる。あの頃の僕らとは違うのはオセロをやめたことと若干の飲むペースの老化くらいである。

あの頃の僕は毎日のように大学の講義のあとロリポップが好きな女

性の家で裸を見せ合ったり、友人とダーツやビリヤードをしたり、夕日の見える丘を探しに車を走らせたリ（結局僕が車を走らせた限り夕日の見える丘は日本になかった）AVの撮影を行う現場をデジタルビデオで撮影したり、水商売のバイトをしたり、水商売の女性と大麻を吸いながら水商売の女性の家でセックスをしたり（この時吸った大麻がきっかけで僕は警察に捕まりそうになった）新宿で夜通し飲み続け朝目覚めると暴力団の事務所のソファに寝ていたり比較的多少の刺激のある退屈な日々を消化していった。

旧友について考えていた日の数日後、段ボールを空け赤ちゃんの死体が目に映った時はこの日のことを思い出し大学時代と同じような時間がこれから先流れていくのではないかと感じた。

刺激と退屈さが混在し未来を考える隙間を埋めてしまう時が流れ、様々な刺激を抱えながら自分自身への意味のある時間は減っていく。退屈さというのはその物事に対し興味または関心が薄れる際に生まれてくるものだ。究極に退屈になるのは自分についての興味や関心が薄らいでくることであり、今の僕（毎日意味不明な仕事に終われ生産的なことを成さない僕）の状況はまさに究極の退屈であった。そして大学生の僕も毎日が自分に興味が無かった。

自分を変えたいだとか自分について考える時間は皆無だったように思われる。

そういった僕にはなぜか退屈さに呼応するように刺激がついて回ってくる。

僕は一旦段ボールを閉じた。

段ボールから離れて部屋の隅で深呼吸をし腰のストレッチを入念に行った。

腰からは腰椎と腰骨が擦れる音が綺麗に鳴り僕は少し興奮している自分に気がついた。

## パンジー

目を覚ますと庭からはパンジーの香りがした。

私は同居人のパンセの煙草の吸殻を片付け、脱ぎ散らかった彼女の下着を一通り洗濯機に入れた。

彼女は3時間以上前にオフィスに向かっているらしく、私は急いで昨日作った温泉卵を割って殻に乗せ、キスをするように中身をすすった。

洗面所の鏡を見て口のまわりの白身をティッシュで拭きとり顔を洗った。

鏡を見ると特徴的と良く言われる垂れた目に細い眉、小さい鼻と膨れた下唇がいつものように映った。

化粧はしなくてよいとパンセからはよく言われる。

私は特にその理由を聞かなかったし、他人がしなくてよいと言うのだからする必要がないと感じた。

顔の水分をタオルでよく拭き取り衣装掛けから紺色のダッフルコートと淡い水色のネルシャツを取り素早く着た。

私は履いていたスウェットパンツを脱いでダンスから出したストッキングに足を通し先日パンセから貰った赤と白のボーダーが入ったスカートを履いた。

私が着る服は大半が彼女からの貰いものであった。

彼女は三日に一度のペースで服を買い、すぐに飽きると私に渡した。

私は家の中の一通りの電気系統のスイッチをオフにし家を出た。

車はパンセが乗っていったようので庭の駐車場にはなかった。

オフィスには電車で行くことにした。

オフィスは都内の中心部に位置しており最寄駅からだと約40分はかかる。

私は最寄駅まで冬の準備をすすめる風景を横目に歩いた。

高級住宅街を抜けすでに葉が落ちた木々が園内の主役のように感じ

る公園に入る。

人影のない公園は悲壮が漂いぼつんとサッカーボールをリフティングをしている少年が暗い風景をより濃いものにしていた。

少年は青いアディダスのシューズでボールを浮かし落とすことなく非常にシステマチックにボールを操っていた。

足の甲や側面や踵の使い方が機械的に美しく私は急いでいた足を止めしばらく少年に見入った。

私は人間が行う無機質で機械的な動作が美しいと感じとても好きだった。

そのきつかけとなったのは小学校の時に見たパンセが出場した極真空手の大会である。

極真空手は防具を使用せず顔面への打撃など急所への攻撃以外はたいてい認められていた。

パンセは恐らく（私の記憶が正しければ）空手を習ったりはしていなかったし他の格闘技の経験も無いはずだったが彼女はその大会で優勝をした。

しかも彼女はすべての試合を一本勝ちで優勝した。

両手を前に出し直立するだけの彼女の構えは素人目から見てもとても空手からかけ離れたものを感じた。

試合時間の大半を彼女はその構えとも呼べない体勢で相手を眺めていた。

相手が少しでも間合いに入ると鋭利な前蹴りを飛ばし相手との距離を調整して彼女は自分の空間を守った。

試合中の彼女は日が差した中庭のバルコニーで砂糖の濃いコーヒーを飲みながら午後の休憩をとっている淑女のようだった。

労働からは退き家を支える身になり、午前中で大半の家事を終わらせる。

午後は趣味のガーデニングやエアロビクスに没頭し少し疲れると海外の庭園のように洗練された庭を眺めながらときおり吹く風の声に耳を傾け、庭の植物から発せられる揺らぎを感じながらゆっくりと

過ぎる時間を過ごす。

淑女は優雅さで余暇をより濃いものへ例えとして適切かどうかはわからないがウローン茶に焼酎を徐々に注ぎ足していき濃い目のウーロンハイを作るバーの店員のように濃密な余暇を作っていく。濃密な余暇。

淑女に与えられた命題はある程度の余暇をいかにして濃密にしているかにある。

今日の彼女たち（淑女たち）の余暇の過ごし方は他人に評価されるべきものでなければ自分自身が今日の余暇の過ごし方はちよつとした庭の栽培を失敗したから点数にして70点ぐらいの過ごし方をしたのだと評価をするものではない。

淑女にとっての重要な事柄は余暇を濃密にすることの作業工程にある。

結果は重要ではない。むしろ過程や方法がより重要とされる。

決められた時間をいかにして工夫を施し洗練されているものにしていくか。また決められた時間の中で自分達の新しい余暇の過ごし方を輝かしい宝石を鉱山から発掘するように見つけていくかということにあり彼女たちは遠い昔から同じベクトルでそれにあたっている。重要視する点を見失うことなく彼女たちは広い意義での余暇の過ごし方について研究しその濃さを増すよう努力を続けている。

試合中のパンセを見ていると彼女にとっての試合は動揺や緊張とはかけはなれた安息の時間で空間として普段の生活の中となんら変りないように感じた。

彼女は過程に比重を置き勝利とはかけ離れたものを目指していた。すべての試合の終盤に彼女は瞬間移動したように間合いを詰め体を畳に沈みこますようにして低い姿勢から上段蹴りを放った。

この日は6試合彼女は闘ったのだが6試合とも同じ動作で間合いを詰め上段蹴りを放っていた。

まるで同じビデオを繰り返し再生するように彼女は同じ動作を無機質に数ミリの狂いも無く同じ上段蹴りを相手の側頭部に当てた。

彼女の上段蹴りは初動から足をふり終わらずまで全ての呼吸や間合いが統率され事細かに足の振り方、角度が決まっていた。

まるで彼女が上段蹴りを作成しているかのように非常にシステムチックで機械的な動作だった。

そしてなにより、彼女とアディダスの青いシューズを履いた少年と共通している事項は二つあり一つ目は二人とも無表情で動作を行うことであつた。

二人とも感情がなく作業的でなおかつ無感動である。

リフティングが100回続くことや相手をKOすることは二人にとって非常にどうでもいいことであり

それはその動作や競技が目指すものと逆行している。

他愛もないことをただひたすらと感情をこめず興味を持たず続けている。

二人のものをしている人間は色の無い光景が延々とスライドショーされているように感じ彼女たちにある意味で興味を持ち共通した感情でもう一度彼女たちを見たいと思うようになる。

そしてもう一つ共通しているのは二人とも同じ動作を反復的にやっているということであつた。

すなわちそれはミスが無い完璧な事柄の進め方であつた。

二人は無理に自分のフォームや体の使い方（腰の捻り、足の角度、顔の向き、体全体における力の入れ方）を変えることなく変動のないパフォーマンスを演出し続けた。

決して変わることはない決められた動きは二人の筋肉に電子パネルが埋め込まれておりどこかでそれを操作する人間がいると言われても不思議さを感じないぐらいだった。

二人は精密な動作を繰り返し続けた。

誰の評価を気にすることなく自分の慣れ親しんだ空間で精密動作という名の一線を越えたダンスを踊りつづけた。

アディダスの青いシューズを履いた少年は結局私が彼を眺めている間ボールを地面に落とさなかつた。

無表情にそして無機質な色の公園で坦々とボールを浮かし続けた。  
私はまたこのリフティングを見に来ようとこの公園を訪れようと思  
った。

公園を後にし北西からの冷えた風が吹きつけてきたので私は少し足  
早に駅を目指した。

最後に少年の青いアディダスのシューズの紐が彼の動きと風により  
大きく舞い上がるようにほどけていったのを確認した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2201x/>

---

カズンズ

2011年11月5日16時17分発行